

2 学期始業式式辞

今年の夏も酷暑の日が続きましたが、皆さんは、充実した夏休みを過ごせたでしょうか？ それでは、2 学期がはじまるにあたり、今日は三つのことを話したいと思います。

まず一つ目の話です。この夏休み中には、7 月に熊本地震、8 月に千葉豪雨が発生し、自然の猛威を改めて突きつけられました。皆さんと同じ高校生の中にも、家族や大切な人を亡くしたり、自宅が壊れて過酷な避難所生活を送る人、受験勉強や部活動などが十分にできず困っている人が多数います。私たちは、まずは何事もないこの日常がいかに有難いかを、また「愛媛県は関係ない、自分は大丈夫」という思い込みが、いかに危険であるかを考え直す必要があると思います。災害はいつどこで起きるか分かりません。その時に、皆さんに求められるのは、指示を待つのではなく「自分の命は自分で守る」という強い危機意識と主体的な判断による行動力です。今から3 年程前に、本校で放課後、数十名の生徒が教室で自習をしているときに震度4 の地震が起きたそうです。その際、生徒たちは自分たちの判断で全員がグラウンドに避難したという話を当時の校長先生から聞きました。先輩たちのいざというときの行動力は見事です。皆さんも良き伝統を受け継いで、災害に対する日頃の備えと心構えを、いま一度見直してこれからの学校生活を送ってください。

次に二つ目の話です。夏休み中に、年齢が70 歳を超える卒業生の方からこんなメールをいただいたので紹介します。「高校野球愛媛県大会、後輩たちの活躍は嬉しい限りです。3 回戦の宇和高校戦は0 対6 からの大逆転、まさしく北高健児の矜持(誇り)を感じられる試合でした。逆転勝利もそうですが、プレー中に負傷した佐伯君が一度セカンドの守備に着いた際、宇和高校ベンチに「治療に時間を要したことに対し」キチンと帽子を取って謝罪した行動には心打たれるものがありました。勝利後、校旗掲揚と共に歌われた校歌は、私も一緒に斉唱させていただきました。次戦・準々決勝、強敵松山商業戦も北高生らしく戦って欲しいと願っております。北高健児の健闘を古都・奈良から祈っております。」以上です。この方は、佐伯君の謙虚で礼儀正しい行動に「さすが北高生」と嬉しく感じたのだと思います。そして、母校の後輩たちには、様々な場面において品格のある振る舞いができる知的な人間であってほしいと期待しているのでしょう。皆さんは、このように多くの方々に見守られ、期待されていることを忘れず、北高生としての誇りと自信を持って、これからも自分を磨き続けてほしいと思います。

最後、三つ目の話は、今日から始まる2 学期に、明確な目標を定めて、或いは再確認して進んでほしいということです。本校にゆかりの深い小説『坂の上の雲』の主人公として登場する本校第4 代校長の秋山好古先生、秋山真之、正岡子規ら3 人は、明治という激動の過酷な時代を生き抜きました。彼らには共通する姿があります。それは、いかに厳しい現実直面しても、決して下を向かず、「坂の上の、ただ一朵の白い雲のみを見つめて、明るく前向きに夢を追い続けた」ということです。2 学期は、3 年生にとっては大学受験という大きな壁に挑む正念場であり、1・2 年生にとっては日々の学習や部活動で中心的

な役割を担う、心身ともに最も成長できる季節です。時には、模試の結果に悩んだり、部活動で壁にぶつかったりして、立ち止まりそうになることもあるでしょう。しかし人は、「自分はこうなりたい」という強い思い（目標）を持つことで大きな力を得ます。そして、目標に向かうプロセスそのものを、明るく、元気に楽しむくらいの強さを持ってほしいと思います。それを人生で表現したのが秋山好古校長先生です。その精神は本校の校風として受け継がれているので、皆さんにも必ずできると、私は信じています。

それでは、皆さんが、北高生らしく明るく元気に、それぞれの「一朵の雲」を目指して、この2学期に大きく飛躍することを期待しています。